日本山海名物圖會

五

河蝦(かハゑび)

川海老(かはゑび)とらふハ竹の簀(す)とうぎれ手よ立まりておき秋よ入てそのころふて松明(たいまつ)とふれバその火のひかりよつれておよるを玉(たま)あくみですくひとく鎌(かま)川へ前のおちうち時川ぎしよてうぐりとなけバえびみ多くよりあつまるを網(あみ)よてすくひとれバ

山海名物図絵 五
八月鯖鮎
正字ハ鰷と書べし鮎の字ハ俗也此魚春の初ッ海と河とれ
界ニ生れ河をさかのぼる夏ニなりて能く生長し八月
より身ニさびを生じそれより八河より下りて海瀬ちかくにて子を生て
死する也八月の落鮎を云ふ八河のながれを止とめ其中をはなけて竹の簀
を敷て上へ落るを取也此竹のすを簗と云又鮎ハ人音すれハ底ニしづみて
動かざる故ニ是を取ニハ静にして人音を禁して居る時ハ鮎おのづから落来る也

淀鯉

鯉ハ河魚の第一上品神農本草にも鯉を魚の王とまでいへり
山城国淀の産を名物とす中にも淀城の水車のほとりに住
鯉一尺黄鱗なるハまれなれども車の辺にて網打ことハ淀の城より
御制禁あれハ猟師てんでに魚をとること叶ハて鯉の大小ハ一尺ぬ三年ぬ
ことわりにて年かさなりてゐる下とこゆ川年久しくへたる魚ハおそれあるべし

勢田鰻鱺

江州勢田より出るうなぎ名物也是近江の湖水にて
とるところへ小舟よのり釣針まて流しづりまてとる又
うなぎつりといふ物これまて水の中とうさしても取之○日向国よりいづる
うなぎ至大きくふとさハ一尺まハり長さ六尺余あるもあり余国にハなき
大うなぎ也○勢田より鯢出名物也余国よりハおちかきして風味よし

江鮒引網

鯔河ちかくある海ならありちいさき時をすべて江鮒と云
是をとるハ地引網のごとく長さ二町ばかりの引網にして曳方
のほふまは人あまたかゝりて磯へ引よせて玉網をもてすくひたくはへて
江鮒ハ海と川との瀬ざかひに多くあつまる泥川に生ずるハ肉あしく臊多し
砂川に生ずるハ肉白くあぶらすくなし ゑぶな正字ハ撥尾魚と書

蜆貝

海と河との堺に多く生ス又湖にもあり小蜆をとりて泥池の中にやしなひおけバ年をへて大きくなりて味よしといへり蜆をとれハ竹籠をもつて底に袋網を附て水中とかきてれく土砂ハ先に袋の中へ入てしゞみハ袋の中に残り土砂ハ袋あミよりもれてのく然しゞミハ貝を釜にてたきて水にかけて貝殻を去てむきみとする

摂州尼崎香貝

香貝といふもの昔ハなかりしに六十年来尼崎の浦よりおほくいでしが毒ありとて人くハざりしが二三十年このかたハ一寡賞翫する事となれりて されバ下品の貝なるか貴人などの料理にハ用ゆることなし此貝をとるにハうごかぬやうに舟のこりよふけて舟にハ帆をうけて風に随ひさせゆく鋤網を砂にさしてまき香貝をかき入てる之蜆蛤とるに大かた同し

章魚（たこ）

大だこ小だこ八梢魚（くもだこ）・望潮魚（いひだこ）・石距（てながだこ）なり 猿列のたこの名也 但てるの大だこはあまり大なり牛馬をとり義姿の中へひきこみして・人のおもてをさぐるといへり○たこをとるにはたこ壺といふものにふたつつけて縄の末の切口をうけようつけて海へ迄一日一夜おいてひきあぐればつぼの内にたこ入ておるく海中にて人ますねはほけべんあれず人のはぎをとりてたくせばよくたぐるとぞ

海人(あま)

海士(あま)とも蜑(あま)とも書く世には蜑といへバ女(をんな)の浪をかづくやうに
なれども男(おとこ)あまも皆(みな)海人と書ハ男女の通称(つうしやう)なり
さぐりあて海中(かいちう)へ飛(とび)入鮑貝(あはびかい)をとるに腰(こし)よりつけて海底(そこ)
へ持行(もちゆき)あハび貝をとれ入くしてあま海上(うへ)よりあがれバ舩中(ふなかた)にハと引(ひき)て
其(その)手に縄(なは)を取(とり)て舟(ふね)へ入るゝなり海人の身をそぐさるゝみを舟まで綱(つな)
まて網(あみ)とも海あり此れハ鯛ハ網にて又海中にも縄かゝるなり

梭魚兒

かますごハ小魚の名なり 又ハいかなごと云 摂州尼崎兵庫の浦にて多くとる 網ハもぢあミと云 まづ網をはる舟十に而ハ東にてあミこち 次ハ菜草にてあミ前中ハ背戸網と清ふ 其人数十四人また又ハ二つさらひことて網舟二艘あり 又舟二そう四艘の舟にりやいとつけ四方にまわりして網を入る かますのごとく数人じはくとれるもせんじがらと市へおくりて かますごとて売る

鰮網（いわしあみ）

いわしあみハ大小二網あり大をまかせと云小をそらだと云此二
あみを一里四方へ張てそのまかせとあぐりと云かけつぶの中程より
舟二そうつけてあみの一所へよりねやうより両方へかぎまで引く網船の
先より沖へ舟ハまあみさうの両こととて二艘にて舟よりけんぼうとていわしと
ねけねやうより沖へ進む者ハ多人数なり○伊予の宇和島いわし多し関東
までハ総州銚子浦より多くある丹後より出るいわし名物之風味よし

赤鱏（あかゑい）

海[illegible]

これとるには漁人舟よのくゝ舟だくことこそくげばゑい多くうかれ出るこれをとりよてつきされあり　ゑいの尾よて人をさせば即時よ人死すといへりこれは棒搦と竹てよぶ

海まこ鹿子ともいふ漁人これをとるにはいくらの津もちよくにいれてこよりよはけて船へ入るるれは海水そこにまづくみえ生くなからこを時もちとかいごまよてをくひえかいごみは柄の付たる小網え

鯨遠見

古来より網にて取るくじらハ本式なれとも今に至る
所ハ画工長谷川光信海邊まで来いの鯨とあんぐく
其要用をとうりおを正としてすべしくじらハ山のまよ小屋をつくり
ことに見張にて遠くをうくとそへて来をうる舟へ志らせるとくじら
ごくの種類ハざとう・小くじら・まつかう・せみ・あがせと云あがせハ鯨の
事にて三十三ひろをしくじらハあへつけてもさうるゝが鯨ぞれ仮作せ

鯨吹氣図

鯨潮と吹とけを吹き是を遠見より見つけてお図の
ちらせたれば鯨つく舟を出して窮まで突とりくわんに
夜叉なり一方ハ旗く一方ハ差し上へむけてふぐる時ハ下へ打ちさぐ々鍪
く鯨驚きてたち沈まりるを追ひてあり々ハ深くえいろとく鯨舟十六艘沈舟
二そう先きまえく舟一艘に人数十四人づ々浪とれさやいと云りつきをもぞくしと云
舟一そうにともろ一丁さきろ一丁まか一方に五丁ばかりて八丁一丁まで入りく

鯨置網

くじら鯨鯢の字を用ゆるハ誤なり海鰌と書ぐ二字にてくじら大魚
ハ雄とものむく日の光にて鰭をひらめかすハ旗をうるがごとく
沫を吹けハ雨のごとし 其海上にあらハるゝ時ハあさりも山のごとし 行来の
これにあたれハ必さいなんあり 鯨の口の下あごに大縛あり 椶梠の皮にて網て船を
拵あるハかくのごとくに見ゆる網舟十二艘人数十五人づゝ是ハ先へまハりて網を
おろし 釜へくぢら出あひてさまよげられてよわるゝ身ハ辰の卒ほろ川中に沈みにて近

鯨突船

くじらつき舟十六艘舟ごとに一のりより三本数かね
十二本大もりあをけんを投うくあり一のもりと
ゆくさる舟にのぼりのかまふさねてとるく鯨をとおく
刈銛傷をそるとし殺しく五三里が間ものまけるとゑへ潮背
ようりて死せる潮まあがりていりしめまとゞひろまへ互へて死するとく

鯨引寄図
山海名物圖繪 五
十六

畫工　松翠軒長谷川光信

寶暦四年甲戌初夏吉日
寛政九年丁巳初春求板　平瀬徹齋撰

浪華書林

梶木町渡辺筋　播磨屋幸兵衛
心齋橋通南久太良町　鹽屋長兵衛
同　鹽屋卯兵衛

發行書肆

江戸日本橋南壹丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　二丁目　須原屋新兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　和泉屋吉兵衛
同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八
同　兩國橫山町壹丁目　出雲寺萬治郎
同　下谷御成道　紙屋徳八
尾州名古屋本町三丁目　菱屋藤兵衛
大坂心齋橋南久寶寺町　河内屋源七郎板